イタリアの「言語問題」における言語と文体の概念(Ⅲ)

ダンテ『俗語論』はどのように読まれたか

糟谷啓介

1　マンゾーニの言語実践

これまでイタリアの「言語問題」の枠組みのなかで、ダンテの『俗語論』がどのように解釈され、どのように評価されてきたかを見てきた。そこからわかるのは、『俗語論』が「言語問題」の流れのなかで特定の立場の根拠として利用されたり、逆に、仮想敵として否定されたりしてきたことである。簡単にいえば、『俗語論』は、一定の意味内容が収められたテクストではなく、立場に応じてさまざまな解釈を受ける「論争の書」でありつづけたのである。そのことは、これから論じるマンゾーニの場合も変わりがない。

マンゾーニの『俗語論』解釈について論じるためには、マンゾーニの言語思想の変遷を見なければならない。しかしそこにはいくつかの段階ないし局面がある。そして重要なポイントとして、マンゾーニが代表作『いいなづけ(Promessi Sposi)』を執筆するプロセスのなかで、イタリアの「言語問題」が課する試練に直面したことがある。後に見るように、マンゾーニはイタリア統一直後に現実の言語政策に向けて具体的提言をしていくことになる。しかし、マンゾーニがどんなに政策的な提言をしようとも、その底には、作家として経験した言語的苦闘があったことを忘れてはならない。

マンゾーニは、作家生活に入って間もないころから、イタリアの言語状況に対する痛切な意識をもっていた。1806年2月9日付のクロード・フォリエル――マンゾーニが生涯を通じて親交をもったフランスの文献学者――に宛てた手紙には、こう書かれている。

私たちにとって不幸なことに、イタリア国家はばらばらに分裂しており、すみずみに行きわたった怠惰と無知とが、話しことばと書きことばのあいだに甚だしい隔たりを作り出しているので、書きことばはほとんど死んだことばといってもよいのです。このため、作家は多数の人間に語りかけようと決心しても、その効果を作り出せません。〔中略〕打ち明けていえば、パリの民衆がモリエールの喜劇を理解し、喝采を送るのを見ると、喜ばしくもあり、羨ましくもあります。(Manzoni 2000a: 4)

チェザロッティやペルティカリにとって、話しことばと書きことばのあいだの隔たりは、「イタリア共通語」が成立するために受けいれるべき条件であった。彼らにとって、その隔たりはなんら解決すべき問題ではなかったのである。ところが、マンゾーニにとってはそうではなかった。それは「多数の人間への語りかけ」を妨げ、作者が願う「読者への効果」を阻害する否定的な要因でしかなかったのである。しかもその根本的原因は「イタリア国家の分裂」にあると認識された。このように、マンゾーニにとっては文学的問題と政治的問題が分かちがたく結びついていた。したがって、イタリアにおける言語状況の改革は、すぐさま政治状況の改革に結びつくのである。とはいえ、その問題が前景化するのは、まだ先の話である。

こうした言語的難問が具体的に現れたのは、マンゾーニが歴史小説の執筆をこころざしたときである。その苦悩のありさまは、またもやフォリエル宛の 1821 年 11 月 3 日の手紙で詳しく語られている(Manzoni 2000a: 307-330)。それは以下のとおりである。マンゾーニによれば、歴史小説の目的は「現実に類似した事実と登場人物によって社会の一定の状態を表象すること」にある。けれども、「このような主題を扱う際にイタリア語が妨げとして課す困難」は、とてつもなく大きい。なぜなら、社会で起きる出来事を正確に描写し、状況や人物の詳細な分析をおこなうに足る語彙と文体をイタリア語がもっていないからである。マンゾーニは、このような状態を「イタリア語の貧しさ」という表現で言い表している。フランス語のように、あらゆる場面で話され、会話や書物であらゆる話題が扱われるような言語であれば、このような問題は起こらない。それに対してイタリア人は「トスカナ人でないなら、ほとんど話したことのない言語で書く」のであり、しかも「その言語では、重大な問題が明確なことばにされて議論されない」のである。マンゾーニはこうしたイタリアの言語状況のなかにおかれた作家の悲劇を次のように診断する。

したがって、いままでイタリアでなされてきたもののなかには、近代的で優れた観念に対して、さまざまな表現を包括するような型が存在しません。このあわれな作家にとって、いわば読者と経験を分かちあうというあの感情、作者にも読者にもひとしく知られている道具を手にしているというあの確信感が完全に欠けているのです。(Manzoni 2000a: 311)

マンゾーニはここで、言語を通して作者と読者がともに参加する「想像の共同体」を夢想しているといっても言い過ぎではないだろう。そうした共同体がありさえすれば、すべての者に共通の言語、現実を正確に描写する文体、社会を表象するための題材、社会的広がりをもった公衆などに関するあらゆる問題が解決されるはずであった。まさにこの認識こそ、マンゾーニ以前の「言語問題」には欠落していた部分であった。

しかし作者としてのマンゾーニは書かねばならない。ここでマンゾーニは一種の人工的折衷文体を提案する。マンゾーニが目指したのは、言い表すべき観念の秩序にあわせて、そのつど言語表現を作り出していくことである。マンゾーニは、「必要」と「アナロジー」という啓蒙主義的原理 —— この二つの概念はコンディヤックの言語理論の根幹にある —— にしたがって、伝統的文学語を的確に拡張し、フランス語から必要なものを機敏に引き出すことができるなら、「文体のおおよその完璧さ」に達することができるだろう、というのである。このような解決策は、フランス語が典型的に表しているような「ヨーロッパ的文体」(Corti 1969: 147)をイタリア語に移植しようとする試みであった。

こうした野望をもってマンゾーニは、1821 年秋から小説『フェルモとルチア』の執筆にとりかかるのだが、早くも 1823 年秋には作業が中断する。ほぼそのころ書かれたと思われる第二序文では、そこで用いられた文体が「ロンバルディア語、トスカナ語、フランス語、さらにはラテン語までもが、それぞれ少しずつ混ざった、文章の不消化な混合物」(Manzoni 1971: 7)と評される。この言い方からもわかるように、マンゾーニはみずからが企てた言語の混淆による実験的文体には飽き足らなくなっていた。その代わりにマンゾーニは、文章語が基づくべき明確な規範を探し求める。マンゾーニは、まず候補として自身の母語であるミラノ語をあげるのだが、すぐさまそのことばを翻して、理想の規範をトスカナ語に見出すのである。この序文の末尾では、こう語られている。

他のなによりも比べようもないほど美しく豊かであり、より一般的な観念を表現す

るための材料を備えた別のことばがイタリアにはある。誰もが知っているように、それはトスカナ語である。ある時代までは最も高度な観念を表わすのに十分であったこの言語が、かつてヨーロッパ的認識の水準にあったとすれば、いまでもまだそうであろう。(Manzoni 1971: 9)

こうしてマンゾーニは、トスカナ語を基礎にした文体を創るべく、小説の全面的な書き換えをおこなう。それにともない、小説の叙述様式や内部形式に決定的な変更がなされ、作品に厳密なリアリズム性が備えられる(Nencioni 1983: 12–27)。その結果、完成したのが 1827 年版『いいなづけ』である。

しかし、マンゾーニにとってトスカナ語の知識は書物を通じて獲得されたものであったため、この 27 年版には多くのロンバルディア語法が残ることになった。とはいえ、その点がかえって評価されることさえあった。たとえば、デ＝サンクティスは、「方言の生き生きした姿を伝え、ロンバルディア語法とトスカナ語法が混じりあい、イタリアの端から端まで話され理解される言語」が 27 年版にあると称賛した(Monterosso 1972: 23 に引用)[1]。また、ロンバルディア啓蒙主義の流れを組むカルロ・テンカは、後に 27 年版と決定版の 40 年版を比較して、27 年版をむしろ高く評価したが、その理由のひとつは、「とくにどの都市のものでもないイタリア的(italiana)な性格」(Monterosso 1972: 36 に引用)があるとされたからである。「言語問題」の文脈で、この「イタリア的」という形容詞にどのような含意があったかは、すでに述べたので、ここでは繰り返さない。

ところが、またしてもマンゾーニはこれで満足しなかった。後にマンゾーニは、27 年版を執筆した際の苦労を回顧して、その原因は「本当に自分のものにしたことばで書いたなら、精神から自然に湧き上がってくるはずの言い回し」を「自ら作り上げねばならなかった」ことにあったと語っている(Manzoni 2000b: 315)。このマンゾーニの苦悩に解決をあたえてくれたのがフィレンツェ語である。小説の刊行された 1827 年にフィレンツェをはじめて訪れたマンゾーニは、フィレンツェ語の響きに魅了された。このフィレンツェ旅行がきっかけとなって、マンゾーニは生きたフィレンツェ語の口語慣用にもとづいて、小説の語彙と表現を逐一書き換えていく作業に着手する。とはいえ、フィレンツェ語はマンゾーニの母語ではなかったので、その作業は、フィレンツェ生まれの何人かの友人の助言のもとで進められた。こうして完成したのが、マンゾーニが決定版とみなした 1840 年版の『いいなづけ』である。

こうした27年版から40年版への書き換えは、徹頭徹尾「言語的」なものであったことを強調しなければならない[(2)]。だからこそ、マンゾーニはみずからの言語実践のなかから、一定の言語政策的方針を含む言語理論を手に入れることができたのである。マンゾーニが最終的に到達したのは、フィレンツェで話される口語慣用を唯一の言語規範とみなす立場であり、そのことは文学言語の領域だけでなく、それ以外の領域も含む言語政策の次元にも適用されるべきであった。

2　マンゾーニにおける「言語」概念

マンゾーニは『いいなづけ』を執筆する過程で、理論的な観点から言語について考察する必要にせまられた。マンゾーニはみずからの言語実践を支えるような理論的正当化を求めていたともいえるが、マンゾーニの言語理論はそれ自体として問題とすべき内実を備えていることも確かである。なぜなら、残された草稿から判断して、マンゾーニの考察は、イタリア語における文学言語についての具体的問題だけではなく、哲学やいまでいう一般言語学の観点から「言語」の定義を目指したものになっていったからである。マンゾーニの理論的出発点は、ロック、コンディヤック、デステュット・ド・トラシイといった経験論ないし感覚論にもとづいた記号理論であった。遅咲きの啓蒙主義言語論ともいえるマンゾーニの言語理論には、古さと新しさが同居した独特の理論的性格が刻みこまれている。（Vecchio 2001はマンゾーニの言語理論を他の側面と切り離して、もっぱら哲学的次元で徹底的に考察している。）

こうしたマンゾーニの言語理論の一端は、1847年に刊行された書簡論文『イタリア語について』ではじめて公にされた。ここではマンゾーニの言語思想そのものを検討することを目的としていないので、この著作を詳しく論じることはしない。ただ、マンゾーニの『俗語論』解釈につながる要素だけを取り上げるにとどめる。ひとつは言語の「一体性（unità）」の概念であり、もうひとつは「書きことば」に対するマンゾーニの考え方である。

この著作の冒頭でマンゾーニは、「打ち明けて告白すると、自分はラテン語がローマにあったように、フランス語がパリにあるように、イタリア語はフィレンツェにあるという、だれも賛同しそうにない奇妙でおかしな考えをもっている」（Manzoni 2000b: 10）ということばで始まる。しかし、なぜ「イタリア語はフィレンツェにある」というのが「奇妙でおかしな考え」なのだろうか。それは、もしそう述べるならば、フィレンツェは地方の一都

市にすぎないのだから、そのことばをもって「イタリア語」と呼ぶことはできないという「イタリア主義者(italinisti)」からの反論が返ってくるにちがいないからである。伝統的な「言語問題」の枠組みでみれば、こうしたイタリア主義者たちに対して、フィレンツェ文学の威光に支えられたフィレンツェ性がイタリア語に刻み込まれていることを主張するフィレンツェ主義者の反論が返ってくるはずであった。ところがマンゾーニはそうした反論は取らない。マンゾーニの反論は、もし「イタリア語(lingua italiana)」というのであれば、「イタリア的(italiana)」か否かである以前に、そもそもそれが「言語(lingua)」の名に値するかどうかを問わねばならないというのである。したがって、マンゾーニの議論は「言語」の本質をめぐる一般言語学的なものとなる。マンゾーニはこういう。

> イタリア全体にひとつの言語が存在し、フィレンツェにはこの言語の一部しかないと想定することは、言語とは何かを完全に忘れ去ることであり、事物の条件を備えていないものにその名前を適用することである。部分が欠けた言語というのは、矛盾した概念である。言語はひとつの全体として存在するか、あるいは存在しないかのいずれかである(una lingua è un tutto, o non è)。(Manzoni 2000b: 11)

この把握が言語の「一体性(unità)」の概念となって、マンゾーニの言語理論の全体を支えていくのである。マンゾーニにとって言語の「一体性」とは、外的な言語政策によって作り出されるものではなく、言語の内的本質をつくるものであった。マンゾーニは「言語」はたんなる語彙の寄せ集めではないとして、言語をつぎのように定義する。

> その言語を所有する社会がそれについて話す事物に対応したある量の語彙(総体 complesso といったほうがいいが、量 quantità という抽象的な用語で今の議論には十分である)、いかなる形であれ社会が話すすべてを言い表わす手段(Manzoni 2000b: 12、傍点引用者)

この定義からも、マンゾーニがいかに「社会」と「言語」の結びつき、というより一体性を重視しているのがわかるだろう。後にふれる 1868 年の「報告」のなかでは、つぎのような形で「言語」の定義が語られる。

統一した社会において、日常で絶え間なくおこる避けることのできないあらゆる結びつきから必然的に生まれる諸記号の全体性(Manzoni 2000b: 63)

マンゾーニによれば、言語とは「社会的交流の必要を満たす手段」にほかならない(これこそマンゾーニがコンディヤックや「イデオローグ」たちから学んだ考えである)。社会とは、ひとつの言語を通じて絶え間のないコミュニケーションをおこなっている人間集団をさす。マンゾーニによれば、この社会すなわち言語の成立には、地理的広がりの大小は関係しない。したがって、いまイタリアで話されている「方言」はすべて「言語」としての資格をもつことになる。ところが、イタリア主義者のいう「イタリア共通語」はなんら社会の支えをもたない。それはひとびとのあいだの日々の社会的コミュニケーションの支えとなりえず、文学者のための特別な道具としてしか成立しない。結局のところ、彼らのいう「イタリア共通語」はそもそも「言語」の資格をもたないのである。とはいえ、イタリアにはあまりに多くの「方言」があるのは事実である。したがって、なすべきは「多様性を一体性に置きかえる」(Manzoni 2000b: 19)ことである。そのためには、「これらの言語のうちからひとつを選び、生まれながらにその言語を身に着けていないすべてのイタリア人に一致してその言語を学ばせて、共通に使わせること」(Manzoni 2000b: 18)が必要となる。マンゾーニによれば、この言語こそフィレンツェ語なのである。

フィレンツェで話される口語慣用を全土に普及させることによりイタリアの言語統一をなしとげるという、1868年の「報告」の骨格は、すでにこのカレーナ宛書簡で描かれていた。だからこそマンゾーニは、短時間でその報告をまとめることができたのである。マンゾーニの言語政策を論じることは本論文の目的ではないので、詳細は省略するが、重ねて確認しておきたいのは、多数の言語の混淆からなる状態を乗り越えて、ひとつの都市の規範をまるごと採用するという言語政策の方向は、すでに述べた『いいなづけ』の執筆における言語態度の変遷とそっくり重なるということである。ある意味でマンゾーニは、イタリア社会が直面する言語問題を解決するために、みずからの作家としての言語的経験をふまえつつ理論的に引き出した一般的原理を、なんらの修正もなしに政策的提言にあてはめたのである。これらすべての局面を通じて強固な理論的一貫性を維持しようとしたこと、ここに「マンゾーニ理論のラディカリズム」(Marazzini 2011: 18)を見ることもできよう。それによって、ネンチョーニの指摘するように(Nencioni 1983: 5-6)、言語と文学の地位は逆転された。かつては、言語に規範をあたえることが文学の役目と考えら

れてきたのだが、いまや文学は社会に根拠をもつ言語に従わねばならないとされたのである。

「書きことば」に対するマンゾーニの見解には、こうしたマンゾーニの「ラディカリズム」がよく現れている。すでに見たように、マンゾーニによれば、「言語」はそれを支える社会的コミュニケーションがあってはじめて成立する。しかし、それは話しことばを通じてであって、書きことばによってではない。マンゾーニはこういう。

> その量はともかく、言語と呼ばれる語彙の全体をつくるような諸関係の全体性が作家と作家のあいだには存在しないし、存在しえないのだから、書くことは十全たる社会的交流の道具ではないし、そうなりえないのである。(Manzoni 2000b: 31)

> 言語を生活のあらゆる用途に用いる社会、すなわち、その言語を話す社会なくして、どうして言語が存在しうるだろうか。(Manzoni 2000b: 33、傍点引用者)

となると、「書きことば」は「言語」なのだろうか。そうではない、とマンゾーニはいう。「書きことば(lingua scritta)」という表現は、「化学のことば(lingua della chimica)」「芸術のことば(lingua dell'arti)」「法廷のことば(lingua del foro)」とおなじように一種の「比喩(traslato)」なのである。とはいえ、後者の表現は「あからさまな罪のない比喩」にとどまるのに対して、前者は書くための特別なことばがあるかのような考えを呼びおこす。こうしてマンゾーニは、「書きことば(lingua scritta)という言いまわしは、ことばの正真正銘の誤用にすぎず、比喩的ではなく誤った観念を表明し流布させる」(Manzoni 2000b: 32)として、「書きことば」の存在そのものを否定するのである。当代随一の文学者が「書きことば」の価値と存在を否定したこと、まさにこの点にマンゾーニ理論の画期的な意味がある。

ともあれ、このような言語思想をたずさえてマンゾーニは、統一直後のイタリアの言語統一のあり方を素描することになるのである。

3　マンゾーニの「俗語論」解釈

マンゾーニの「俗語論」解釈を正確に理解するためには、これまで述べてきたような文

脈をふまえる必要がある。具体的にいえば、「俗語論」についてのマンゾーニの議論は、1868年に発表されたマンゾーニの「言語統一についての報告」の余波のなかに位置づけられる。まずは出来事の経緯を簡単に紹介しよう。

1867年10月に文部大臣に任命されたエミリオ・ブロリオは、就任からまもない1868年1月14日の省令で、懸案であったイタリアの言語統一の問題に取りくむための委員会を設置した。その委員会の任務は「正しい言語と発音の知識を国民のあらゆる階層に広めることができるようなあらゆる措置と手段を研究し提案すること」と定められた。この委員会は二つの部会に分けられた。ひとつはマンゾーニを座長とするミラノ部会、もうひとつはランブルスキーニを座長とするフィレンツェ部会であり、全体の委員長はマンゾーニが、副委員長はランブルスキーニが務めるという構成になっていた。このときマンゾーニの対応はすばやかった。委員会が設置されてから一ヶ月もたたない1868年2月19日に大臣ブロリオに宛てて報告書を提出する。それが「言語の一体性とそれを普及させる手段について(Dell'unità della lingua e dei mezzi di diffonderla)」と題された報告である[(3)]。この報告書はフィレンツェの雑誌Nuova Antologiaの3月号とミラノの雑誌Perseverenzaの3月号に発表され、大きな反響を呼びおこす。そしてこれ以後、マンゾーニの支持者と反対者のあいだでの激しい論争へと発展していくのである。このときマンゾーニは83歳という高齢であった。

ここでこの「報告」について詳しく議論はしない。その内容は、すでにカレーナ宛書簡「イタリア語について」のなかで描かれたものに基づいているが、そこに実践的な方向付けが加わっている点が特徴である。その結論だけを端的に示すなら、イタリアの言語統一のためには、フィレンツェで話されている口語慣用のみを規範にすべきであること、そしてその普及の手段としては、初等学校でフィレンツェ語の辞書を用いることで生徒を方言から共通語へと移行させることが提案される。

この報告に見られるマンゾーニ理論の画期性は、これまでの「言語問題」をめぐる論争がかわされていた舞台をまったく異なる次元に移しかえたことにある。すなわち、「言語問題」の内部に政治的・社会的問題を取りこむのではなく、「言語問題」それ自体を政治化・社会化したのである。この点をマンゾーニはよく自覚していた。報告の末尾でマンゾーニは、大臣ブロリオの功績は「一束の文学的問題を社会的国民的問題に置き換えた」(Manzoni 2000b: 76)ことにあると称賛している。しかし、この功績はひとえにマンゾーニの手によるものであったといえるだろう。

このマンゾーニの報告に対する応答として、ランブルスキーニによるフィレンツェ部会の報告が同年5月に発表された(Lambruschini 1868)。しかし、その報告は奇妙なもので、マンゾーニの提案の核心部分にふれることはなく、議論はひとえに辞書の作成方法のことだけに集中していた。それによれば、マンゾーニのいうようにフィレンツェ語の慣用にもとづく新しい辞書を作る必要はなく、クルスカ辞書などの既存のいくつかの辞書を組み替えるだけで対応できるとして、マンゾーニにやんわりと反対意見を述べるものだった。しかし、本当のところをいえば、フィレンツェ部会はマンゾーニの主張の根幹を理解していなかった。マラッツィーニが指摘するように、フィレンツェ部会には、「クルスカに代表される文学伝統に決然と背を向けた」「マンゾーニの提案の革新的な射程が受け入れられなかった」のである(Marazzini 2011: 22)。

このフィレンツェ部会からの反論に対して、マンゾーニは上の報告の3倍ほどの長さをもつ「言語の一体性についての報告への補遺」を1869年5月にミラノで刊行する。そこでは、フィレンツェ部会の報告を逐一反論し、マンゾーニ独特の言語の「慣用(uso)」に関する理論が展開された。そして同年11月には、またしてもランブルスキーニから、今度はマンゾーニの主張に対して正面から反駁する論説が発表される(Lambruschini 1869)。こうして、マンゾーニ理論をめぐる論争が展開していくのである。

マンゾーニが「俗語論」について論じた論説「ダンテ・アリギエリの書『俗語論』についての手紙(Lettera intorno al libro De Vugari Eloquio di Dante Alighieri)」[(4)]は、やはりミラノ部会に属していたルッジエーロ・ボンギ[(5)]に宛てた手紙が基になっており、1868年3月にミラノの雑誌 Persevaranza に発表された。つまり、マンゾーニの俗語論解釈は、時間的にいうと、68年の「報告」の直後に書かれたものであり、同年4月に書かれた「辞書についての手紙」とともに、マンゾーニ主義の理論的内容をさらに広げて展開した69年の「補遺」に橋渡しする性格をもっている。

「『俗語論』についての手紙」は、ブロリオに提出した「報告」でダンテの『俗語論』に言及しなかった理由をボンギに説明するという設定で書かれている。しかし、「報告」のなかに『俗語論』と関係する箇所があるわけでもないのに、なぜことさら『俗語論』を取り上げて議論しなければならないのだろうか。それは、「言語問題」の文脈でだれかが何かを主張したなら、『俗語論』はその者の真意を測るリトマス試験紙のような役割を果たしていたからである[(6)]。

ともあれマンゾーニは、『俗語論』が16世紀にトリッシーノによって「発見」され、コル

ビネッリによって原典が刊行されたことに触れたのち、とくにペルティカリの名前をあげて、その著作によって『俗語論』が再び脚光を浴びたことを述べる。しかし――とマンゾーニはいう――、ペルティカリの著作がどれほどの影響力をもったにしても、原典にせよ翻訳にせよ、『俗語論』を刊行した出版業者はそれほどいなかったのだから、実際にその書を手に取って読んだ人間は限られているはずである。『俗語論』はいたるところで引用されるが、きちんと読まれていない。だからこそ、「その本のなかでダンテはイタリア語(lingua italiana)を定義しようとし、実際に定義したという謬見がこれほどまでに世に根付いている」(Manzoni 2000b: 112)のだ、とマンゾーニはいう。ただし、『俗語論』はほとんど刊行されてこなかったというマンゾーニの判断には誤りがある。この点については、すでに19世紀末にヴィヴァルディが指摘している(Vivaldi 1898: 279)。

それでは『俗語論』は何について論じた本なのか。マンゾーニはこういう。

> わたしが「報告」のなかで『俗語論』に触れなかったわけを正当化するために、〔中略〕こう言わねばならない。イタリア語の問題に関して、この本は埒外にある。なぜなら、その本のなかでイタリア語のことはいささかも論じられていないからである、と。(Manzoni 2000b: 112)

マンゾーニの言語論を読むときに念頭におかねばならないのは、マンゾーニにとって「イタリア語(lingua italiana)」とは、何よりもまず「言語(lingua)」でなければならないという論点である。『俗語論』解釈にあっても、このことは変わらない。

> その本を著わすに際して、ダンテはイタリア語のことをほとんど考えていなかった。そこで取り上げた事柄に対して「言語(lingua)」という名称を一度もあたえていないのは、そのためである。(Manzoni 2000b: 112)

こうして、マンゾーニはダンテが「高貴な俗語(volgare illustre)」を定義した箇所を引用して、そこに「『言語』とは一言も書かれていない(Lingua, mai)」ことに注意を向けるのである。しかし、ダンテが「言語(lingua)」という用語を用いていないことが、なぜそれほど重要になるのだろうか。それは、ここでマンゾーニは『俗語論』の行論に自らの「言語」概念を読みこんでいるからである。すでに見てきたように、マンゾーニの言語論のすべ

ては、この「言語」の概念 ── 社会の交流に役立つ「慣用」に支えられた「一体性」をもつ記号の総体 ── を出発点として成り立っていた。だから、マンゾーニにとって、このことは「たんなる言葉づかいの問題」(Manzoni 2000b: 113)ではなかった。こうしてマンゾーニは、ダンテのいう「高貴な俗語」とは「イタリア共通語(lingua comune all'Italia)」にほかならないと主張する者の議論の根拠を切り崩そうとするのである。

マンゾーニは、『俗語論』第二巻でダンテが「高貴な俗語」とは俗語のなかで最もすぐれたものであるから、最もすぐれた題材のみをあつかうのがふさわしいと述べる箇所(II, 2, v)とそれにつづく箇所に注目する。そこでダンテは、人間の魂が植物的、動物的、理性的な三つの働きをもち、それぞれの領域において最も高貴なものが「壮健、愛、道義」であると述べ、これらが「高貴な俗語」の扱う題材であるという。これをふまえてマンゾーニは、「高貴な俗語」とはこうした特定の題材をあつかうための文体の一様式であること、つまり、「「高貴な俗語」によってダンテは「言語(lingua)」を意味していない」(Mazoni 2000b: 114)と主張するのである。

たしかにダンテは、ホラティウスの『詩論』以来の伝統をふまえて、悲劇、喜劇、哀歌というジャンルに対応した文体の三類型 ── 崇高体、中庸体、低俗体 ── を立て、「悲劇的文体で詩作すべきものと判断されるときは、高貴な俗語を使わねばならない」(II, 4, vi)と述べている。そして、悲劇的題材をあつかう詩形としては、カンツォーネがそれにふさわしいとされる(それに対して、バッラータやソネットはより低次の形式とされる)。こうしたダンテの議論を根拠にして、マンゾーニは、「高貴な俗語」とは「詩のことば(linguaggio della poesia)、というよりも詩の特定のジャンルのことば」(Manzoni 2000b: 115)であると解釈するのである。つまり、マンゾーニによれば、『俗語論』のなかでダンテは、文学のなかの一様式に用いられるべき表現法のことを論じているのであって、社会的次元での「言語」のあり方を論じているのではないことになる。結局のところ、マンゾーニの結論はこうである。「『俗語論』という書物のなかで、イタリア語にせよ、他の何にせよ、言語(lingua)のことは論じられていない。」(Manzoni 2000b: 119)

『俗語論』を少しでも読んだことのある者にとって、マンゾーニの主張に無理があることは歴然としている。というのは、たしかにその書の第二部では詩の表現法のことが書かれているにはちがいないが ── マンゾーニは第二部からしか引用しない ──、第一部では言語の起源やイタリアの方言分類を論じた部分を見ればわかるように、「言語」のことが論じられているからである(この点は、次に述べるドヴィディオによって指摘され

る)。しかし、それではマンゾーニはなぜ無理を承知の上で、『俗語論』では「言語」の問題は論じられていないと力説しなければならなかったのだろうか。

デッラクイラの解釈によれば、この時点でダンテの言語理論を引き合いに出すことは、混乱の元にしかならないとマンゾーニが考えたからである。ひとたび『俗語論』の議論に手を触れれば、マンゾーニがいうところの「五世紀におよぶ無益な論争」――すなわち「言語問題」――に巻きこまれざるをえないだろう。それよりは『俗語論』を切り捨てたほうがよい、マンゾーニはそう考えたにちがいないというのである(Dell'Aquila 1984: 292)。

なるほど、たしかにそういう側面もあるだろう。しかし、ダンテの「高貴な概念」の概念がマンゾーニの言語理論と両立しえない要素をもっていたことも無視するべきではないだろう。ひとつは、「高貴な俗語」が「理念的一者」として「イタリアのどの都市にも局在しないがイタリア全土のことばの尺度となることば」としてとらえられた点である。マンゾーニによれば、言語とは特定の社会にささえられた一体性をもっていなければならない。「言語は全体として存在するかしないかのいずれか」なのである。だからこそ、ペルティカリのいう「イタリア共通語」は現在存在しないのだし、未来の「イタリア語」は「フィレンツェ語」が全土に広まることによってのみ達成されるのである。もし「どの都市にも局在しない」というのであれば、そのことばはそもそも「言語」ではないのである。つまり、「高貴な俗語」は、マンゾーニの言語理論の根幹をなす言語の「一体性」の原理に背馳するのである。

そしてもうひとつは、このことの系として派生することだが、マンゾーニが「書きことば」を言語的実在とみなさない点である。すでに見たように、マンゾーニは、「書く」という行為が社会的コミュニケーションを成立させることはできないとみなしていた。ところが、この点はすでに見たところであるが、「高貴な俗語」は話しことばと分離した書きことばでしかありえない。少なくとも、チェザロッティやペルティカリらはそう考えた。しかし、もし「高貴な俗語」が「書きことば」としてしか存在しえないというのなら、それは「高貴な俗語」が「言語」でないことの証明なのである。マンゾーニならそういうだろう。

実はマンゾーニにとっても、『俗語論』そのものが敵だったわけではない。むしろ、『俗語論』を根拠にして提示されてきた「イタリア共通語」の理念をどうしても否定しなければならかったのである。つまり、マンゾーニの俗語論解釈は、こうした「イタリア主義者」たちの議論の根拠を掘り崩すために書かれたといえる。そして、書きことばとして成立する共通語という考えを否定することがマンゾーニの目指すところであった。なぜなら、

マンゾーニによれば、真の国民語は話しことばとして成り立たねばならないからである。

「言語問題」をもっとも深く考察した研究者のひとりであるヴィターレは、「イタリア語の歴史のなかで、アレッサンドロ・マンゾーニという言語理論家にして作家の著作の重要性に比肩しうるのは、唯一ダンテの著作のみである」(Vitale 1992: 205)と述べたことがある。とはいえ、「言語問題」のはじめと終わりをなすこの二人が、理論的にはすれちがわざるをえなかったことは、きわめて象徴的である。

4 閉じられた環――ドヴィディオの『俗語論』解釈

1868年の「報告」とそれにつづくいくつかの著作によって表明されたマンゾーニ主義に対しては、賛否両論の論争の渦が巻きおこった。おなじ委員会のフィレンツェ部会からでさえ反論が寄せられたことはすでに見た。しかし、マンゾーニの「報告」に対する反響は、せまい知識人サークルのなかだけにはとどまらなかった。マラッツィーニが指摘するように、「おびただしい数の論説と会議を通して、イタリア全土からミラノの巨匠に対する応答が寄せられた」(Marazzini 2013: 265)のである。(マンゾーニの巻きおこしたこの論争の「大砂塵」については、Marazzini 2013: 265-284を参照のこと[7]。)

言語政策に関するマンゾーニの方針は、フィレンツェ語の口語慣用に基づく辞書を作成して、それをイタリア全土の学校で用いることによって、言語統一を実現する、というものだった。このマンゾーニの案に忠実にしたがった辞書の第一巻が、「報告」の2年後の1870年に刊行されると、マンゾーニ主義をめぐる論争はさらに激しさを増した。それが、G・B・ジョルジーニの編集による『フィレンツェの慣用に基づくイタリア語新辞典(Novo vocabolario della lingua italiana secondo l'uso di Firenze)』である。この辞書が徹底したフィレンツェ主義にもとづくことは、その題名から察せられた。というのも、「新しい」という意味の形容詞として、従来用いられてきたnuovoではなく、フィレンツェの慣用にもとづくnovoという形を採用していたからである。

この『新辞典』に象徴されるマンゾーニ主義に対して、もっとも徹底した反論をくりひろげたのが、言語学者グラツィアディオ・イザイア・アスコリである。アスコリは、みずからが創刊した学術雑誌『イタリア言語学(Archivio glottologico italiano)』の創刊号に長大な「序文(Proemio)」を寄稿した(Ascoli 1975: 3-45)。しかしそこで展開されたのは、言語学に関する学問的議論ではない。その代わりに、激しいマンゾーニ批判が全文にわたっ

て繰りひろげられたのである。

ここでマンゾーニとアスコリの対立について詳しく述べることは差し控える。ただ次の点だけを指摘するにとどめよう。ひとつは、マンゾーニがイタリアの言語統一の雛形をフランス型の中央集権的なモデルに求めたことに対するアスコリの批判である。こうした中央集権的モデルがあればこそ、フィレンツェ語が専一的な規範になりうるのである。それに対してアスコリは、イタリアで実現可能なモデルをむしろドイツに求めていた。その背景にはイタリア統一をめぐるアスコリの政治的姿勢があった(アスコリと「連邦主義者」カッタネオとの関係については、Timpanaro 1969: 229–357 の詳細な議論を見よ)。

もうひとつは、アスコリが「書きことば」の役割を積極的に評価している点である。アスコリは、マンゾーニが社会的交流の経路を話しことばだけに限定したことを批判し、「交流の器官は喉に限られるわけではない。読み書きを知っているならば、ペンも交流の器官になりうる」(Ascoli 1975: 17)という。アスコリはドイツを例にとって、書きことばの力 —— アスコリはルターのドイツ語訳聖書の役割を重視している —— によって、知識の普及は早まり、知識の蓄積が強化され、ひいては「きわめて高い領域で創造的合意の過程が持続し再生産される」(Ascoli 1975: 17)とまでいう。「書きことば」という概念は比喩にすぎないとするマンゾーニと比べれば、アスコリが書きことばに託した社会的役割の大きさは歴然としている。

こうしてみると、マンゾーニとアスコリは、言語に対する見方から政治思想にいたるまで、あらゆる点で対立していたといってよい。つまるところ、マンゾーニとアスコリは、両立しえない「二つの異なるイタリア」(Marazzini 2011: 19)を代表していたのである[(8)]。とはいえ、少々行き過ぎの感のあるマンゾーニのリゴリズムをアスコリの歴史主義で緩和するような方向で、両者を調停することが不可能だったわけではない。それをおこなったのが、アスコリの弟子である言語学者フランチェスコ・ドヴィディオである。

ドヴィディオはすでに、24 歳のときに書いた論文「言語と方言」(1873)において、アスコリの線に沿いながら、マンゾーニ主義の肯定面と否定面をより分けようとした(D'Ovidio 1982: 46–65)。そうすることでマンゾーニとアスコリの両者の長所を合体させようとしたのである[(9)]。こうした方向はその後のドヴィディオの仕事を決定づけた。その作業が頂点に達するのは、1914 年にアスコリの「序文」が再刊されたときに付された「言語問題とグラツィアディオ・アスコリ」という論文である(D'Ovidio 1982: 66–72)。ド

ヴィディオは、かつての論文ではマンゾーニの「行きすぎ」を批判していたのだが、この論文では、アスコリのマンゾーニ批判に「論争的な行きすぎ」(D'Ovidio 1982: 70)があったとみなす。つまり、ドヴィディオは両者の主張の論争的な角をたわめることを目指したともいえよう。そのやり方はきわめて巧みなものであった。

ドヴィディオは、マンゾーニとアスコリの一致点は「イタリア文学語のフィレンツェ起源を認める」(D'Ovidio 1982: 69)ことにあるとする。ドヴィディオによれば、両者の違いは、イタリア語の歴史のどこに重点をおいて考えるかにある。マンゾーニは14世紀から16世紀までのフィレンツェが中心性を保っていた時代を重視したが、アスコリは、共通語による文学活動がイタリア全土に拡大した17世紀から19世紀までの時代を重視した。そのうえでドヴィディオはつぎのようにいう。

> しかし、われわれの栄光と苦難の歴史は、これら6世紀すべてを包含しているのであり、われわれの現在と未来における活動は、その6世紀すべてから生まれてこなければならない！ 〔中略〕したがって、フィレンツェ性は真正で清新なイタリア性(italianità)の生きた鏡としてとらえねばならない。(D'Ovidio 1982: 71)

「われわれの栄光と苦難の歴史」とは、イタリアの「国民統一」の物語でもある。ドヴィディオの論述は、リソルジメント達成後に求められた国民の歴史の必要性を満足させるものでもあった。こうしてマンゾーニとアスコリのそれぞれの主張は、ドヴィディオの描くイタリア語史のなかで相補的な役割をもつものとして位置づけられる。ある意味で、イタリア語史は、歴史的大団円を待ち望む物語として、超越的視点から語ることができるようになった。その際、常に分裂と対立の種をまく「言語問題」は、それ自体が歴史化され、歴史を語る者の地点に侵入してこないようにする必要があった。ダンテ以来連綿とつづいた「言語問題」の展開を跡づけたヴィターレは、その研究の末尾で、ドヴィディオが「言語問題」に結論をもたらしたと述べている(Vitale 1978: 471)。たしかにそれはその通りだが、正確にいえば、「言語問題」を解決したのではなく、「言語問題」の問題性を無化したのだといったほうがよい。言い換えれば、これ以後、論者は「言語問題」の舞台にのぼる登場人物としてではなく、その観客として振る舞うことができるようになった。その理由は、これまでは空想でしかなかった「国民」の物語を、遅まきながらイタリアがようやく現実のものとして語ることができるようになったことにある。

このドヴィディオの学問的出発点が『俗語論』研究であったことは、きわめて象徴的である。その論文「ダンテの『俗語論』について(Sul trattato de vulgari eloquentia di Dante Alighieri)」は、はじめ『イタリア言語学紀要』第2号(1876)――つまりアスコリの「序文」が載った次の号――に掲載され、後にドヴィディオ自身の論文集に収められた(D'Ovidio 1878: 330-415)。そこでドヴィディオは、つぎのようにマンゾーニに対してやんわりと批判を投げかける。

> たしかにダンテはその書の第二部で言語についてよりも文体と詩法について語っているけれども、第一部ではまさに言語について語っていること、しかもトリッシーノやペルティカリを満足させるように語っていることは明らかである。(D'Ovidio 1878: 331)

それでは、ドヴィディオはマンゾーニに反対して、ペルティカリらの「イタリア主義者」の陣営に立つのであろうか。そうではない。ドヴィディオは、ダンテの『俗語論』を、みずからに立場決定をせまる論争の書としてではなく、学問的な研究対象となった歴史的文書としてあつかうのである。こうした態度はダンテの議論の時代的限界を強調することにつながった。ドヴィディオは、ちょうど当時発展しつつあったイタリア方言学の知識を総動員して、ダンテの議論の誤りをつぎつぎと指摘していく。「1300年代には言語学がまったく現れていなかったので、すべての者が方言に対する偏見を抱かざるをえなかった。それはダンテも例外ではない」(D'Ovidio 1878: 376)ということばからもわかるように、ドヴィディオは『俗語論』が「言語学以前」の書物であり、現在の学問的検証には耐ええない書物であることを前提にして議論を進めていくのである。いわばドヴィディオは、近代言語学を至上のものとみなす典型的な「ホイッグ史観」にしたがっているといえよう[10]。ドヴィディオにとって、『俗語論』のダンテは、自分と同じ文献学の土俵の上で対峙する相手ではなくなった。ちょうど「言語問題」への対応とおなじように、ドヴィディオは『俗語論』の位置付けを変化させることで、『俗語論』解釈についての論争に終止符を打ったのである。

『俗語論』の位置付けが変化したことを表わすのは、『俗語論』の学問的な校訂版がはじめてあらわれたことである。それをおこなったのは、ドヴィディオの盟友であった文献学者ピオ・ライナ(Pio Rajna)である(Rajna 1896)。そこでライナは、現存する三つの写

本を取り上げて、それぞれの特徴を明らかにし、三つの写本のあいだの関係を突きとめつつ、本文を確定するという、現在でもお手本となるような文献学的作業を進めていく。このライナの研究が出発点となって、マリーゴ、メンガルドとつづく文献学的な『俗語論』研究の道が開かれるのである。

19 世紀末に「言語問題」をはじめて歴史的視点から論じた研究を完成させた文献学者ヴィンチェンツォ・ヴィヴァルディが、マンゾーニ主義をめぐる論争をあつかった第 3 巻をドヴィディオに捧げたのは理由のないことではない(Vivaldi 1898)。そしてヴィヴァルディは、『俗語論』解釈の歴史を跡づけた論文のなかで、「いまやわたしの知る限りマンゾーニの解釈を支持する者はだれもいない」(Vivaldi 2004: 24)と書いた。こうして『俗語論』はロマンス文献学の研究対象になることで、かつてのように論争を引き起こす起爆剤であることをやめたといえよう。『俗語論』をめぐるひとつの環が閉じられたのである。

注

(1) イタリアの「言語問題」の流れのなかでのデ＝サンクティスの位置付けについては、Nencioni 1984 を参照のこと。ネンチョーニによれば、デ＝サンクティスは、中間体の文体はトスカナ語を基礎にするべきであると考えていたが、マンゾーニとその追随者たちの行き過ぎたフィレンツェ中心主義には批判的であった。

(2) 27 年版と 40 年版を対照させた Manzoni 1971 は、マンゾーニの書き換え作業がどのようなものだったかを一目でわからせてくれる。この書き換えについての言語的解釈については、Vitale 1986 を参照のこと。ただしヴィターレは、これまでの論者はマンゾーニの言語政策的提言に引きずられて、27 年版と 40 年版の違いを強調しすぎたあまり、それらの間を貫く共通性を見過ごしてきたと述べている。

(3) この報告書にはマンゾーニ自身の手稿が残っており、そのファクシミリ版が Manzoni 2011 として刊行された。

(4) マンゾーニはこの論説でダンテの著作を De vulgari eloquentia ではなく De vulgare eloquio としている。ドヴィディオの証言によれば、当時は前者より後者のほうが用いられていたようだ(D'Ovidio 1878: 334)。たとえば、あのペルティカリでさえ、volgare eloquio という言い方を採用している。ただし、どちらの題名にするかによって、微妙なニュアンスの違いが出てくる。前者を直訳すれば「俗語の表現法について」となるだろうが、後者についていえば、名詞

の eloquio には「ことば」「言語」という意味もあるため、「俗語について」という意味になりうる。とはいえ、ドヴィディオは後者の解釈は間違っているという(D'Ovidio 1878: 334–335)。写本には題名が付されていないので、題名は後世が決定したのだが、現在ではその内容やボッカッチョなどの証言にもとづいて De vulgari eloquentia とするのが一般的である。

(5) 文人でもあり政治家でもあったルッジェーロ・ボンギは、マンゾーニの友人であり、一貫してマンゾーニ理論を支持していた。ボンギの著作には、マンゾーニと哲学者ロズミーニとの対話を記録した『ストレーザでの対話』があるが、もっとも注目すべきは『イタリア文学はイタリアでなぜ民衆的ではないのか』(1856)(Bonghi 1993)である。この書でボンギは、マンゾーニの考えに基づいて、イタリア文学の修辞学的伝統を徹底的に批判した。そこでボンギは「文体 stile」と「言語 lingua」をめぐる興味深い考察を進めているが、この点についての詳しい検討は他日を期したい。ちなみに、このボンギの書物はグラムシに大きな影響をあたえたことが指摘されている(Lo Piparo 1979: 20–22)。

(6)『俗語論』解釈の歴史については、とくに Mazzocco 1993 と Vivaldi 2004 を参照のこと。ただし、前者はドヴィディオ以降の文献学的研究の流れを主に描いている。

(7) マンゾーニの「報告」をめぐる論争については、19 世紀末に刊行されたヴィヴァルディの著作がいまだに参考になる(Vivaldi 1898)。

(8) ただし、マンゾーニとアスコリに共通の敵がいなかったわけではない。それはクルスカ・アカデミーに代表される伝統的文学語の権威の信奉者たちであった。理論的次元でいかにマンゾーニと対立しようとも、アスコリが「古びた修辞学の強迫観念を追放した」(Ascoli 1975: 31)点にマンゾーニの功績を見たことを忘れるべきではない。アスコリによれば、「形式への過度の配慮」(Ascoli 1975: 30)こそ、国民文化を形成できなかったイタリア文化の病根のひとつがあるのである。

(9) ドヴィディオは、歴史的にみてフィレンツェ語がイタリア全土に広まることで、少なくとも文化的次元では共通語が成立しており、そのことばはすでに元のフィレンツェ語とは異なる形成過程をたどっているとみなした。したがって、マンゾーニが主張するように、いまになってフィレンツェ語の慣用を人為的な手段で広めようとするのは、共通語の形成のさまたげとなる、というのである。

(10) 現在のわたしたちがマンゾーニよりもドヴィディオの議論に親近感をもつとすれば、それはわたしたちが類似の「ホイッグ史観」に陥っていることの証左である。

参考文献

Ascoli, Graziadio Isaia, 1975, *Scritti sulla questione della lingua*, a cura di Corrado Grassi, Torino: Einaudi.

Bonghi, Ruggiero, 1993, *Perché la letteratura italiana non sia popolare in Italia*, con l'introduzione di Folco Portinari, Milano: SugarCo.

Corti, Maria, 1969, *Metodi e fantasmi*, Milano: Feltrinelli.

Dell'Aquila, Michele, 1984, *Manzoni. La ricerca della lingua nella testimonianza dell'epistolario ed altri saggi linguistici*, Bari: Adriatica Editrice.

D'Ovidio, Francesco, 1878, *Saggi critici*, Napoli: Domenico Morano.

D'Ovidio, Francesco, 1982, *Scritti linguistici*, a cura di Patricia Bianchi, Napoli: Guida.

Lambruschini, Raffaello, 1868, "Dell'unità della lingua e dei mezzi di diffonderla", *Nuova Antologia*, III, 5, Maggio 1868, pp. 99–108.

Lambruschini, Raffaello, 1869, "Della unità della lingua a proposito dell'ultimo scritto di A. Manzoni", *Nuova Antologia*, IV, 11, Novembre 1869, pp. 541–552.

Lo Piparo, Franco, 1979, *Lingua intellettuali egemonia in Gramsci*, Bari: Laterza.

Manzoni, Alessandro, 1971, *Promessi sposi*, 2 vols, a cura di Lanfranco Caretti, Torino: Einaudi.

Manzoni, Alessandro, 1972, *Scritti linguistici*, a cura di Ferruccio Monterosso, Milano: Paoline.

Manzoni, Alessandro, 1990, *Scritti linguistici, Tutte le opere di Alessandro Manzoni, Vol. 5, Tomo 2*, a cura di Abgelo Stella e Luca Danzi, Milano: Mondadori.

Manzoni, Alessandro, 2000a, *Carteggio Manzoni-Fauriel, Edizione nazionale ed europea delle opere di Alessandro Manzoni, Vol. 27*, a cura di Giancarlo Vigorelli, Milano: Centro nazionale studi manzoniani.

Manzoni, Alessandro, 2000b, *Scritti linguistici editi, Edizione nazionale ed europea delle opere di Alessandro Manzoni, Vol. 19*, a cura di Angelo Stella e Maurizio Vitale, Milano: Centro nazionale studi manzoniani.

Manzoni, Alessandro, 2011, *Dell'unità della lingua e dei mezzi di diffonderla*. Edizione critica del ms. Varia 30 della Biblioteca Reale di Torino, a cura di C. Marazzini e L. Maconi, Castel Guelfo di Bologna: Imago - Società Dante Alighieri.

Marazzini, Claudio e Ludovica Maconi, 2011, L'Unità d'Italia e la Relazione di Manzoni "Dell'unità della lingua", in Manzoni, 2011, pp. 13–27.

Marazzini, Claudio, 2013, *Unità e dintorni. Questioni linguistiche nel secolo che fece l'Italia*, Alpignano: Edizioni Mercurio.

Mazzocco, Angelo, 1993, *Linguistic Theories in Dante and the Humanists*, Leiden: E.J. Brill.

Monterosso, Ferruccio, 1972, Introduzione di Manzoni 1972, pp. 17–120.

Nencioni, Giovanni, 1983, *Tra grammatica e retorica. Da Dante a Pirandello*, Torino: Einaudi.

Nencioni, Giovanni, 1984, *Francesco de Sanctis e la questione della lingua*, Napoli: Bibliopolis.

Rajna, Pio (cur.), 1896, *Il trattato "De vulgari eloquentia" di Dante Alighieri*, Firenze: Le Monnier.

Timpanaro, Sebastiano, 1969, *Classicismo e illuminismo nell'Ottocento italiano*, Seconda edizione, Pisa: Nistri-Lischi.

Vecchio, Sebastiano, 2001, *La vera filosofia delle lingue. Manzoni linguista e semiologo*, Caltanisetta-Roma: Salvatore Sciascia Editore.

Vitale, Maurizio, 1978, *La questione della lingua*, Palermo: Palumbo.

Vitale. Maurizio, 1986, *La lingua di Alessandro Manzoni. Giudizi della critica ottocentesca sulla prima e seconda edizione dei "Promessi Sposi" a le tendenze della prassi correttoria manzoniana*, Milano: Cisalpino-Goliardica.

Vitale, Maurizio, 1992, *Studi di storia della lingua italiana*, Milano: LED.

Vivaldi, Vincenzo, 1898, *Le controversie intorno alla nostra lingua: dal 1500 ai nostril giorni, Vol, 3. La questione manzoniana sull'unità della nostra lingua*, Catanzaro: Giuseppe Caliò.

Vivaldi, Vincenzo, 2004, *Il "De vulgari eloquentia". Storia delle varie interpretazioni e dottorina principale*, a cura di A. Vivaldi, Soveria Mannelli: Calabria Letteraria Editrice.

（かすや　けいすけ／言語社会研究科教授）

（本研究は JSPS 科研費 15K02409 の助成を受けたものである。）